

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	姫野 優貴弘
論文審査担当者 主 査 内科学 家 田 真 樹 外科学 志 水 秀 行 内科学 金 子 祐 子 医療政策・管理学 宮 田 裕 章 学力確認担当者：金井 隆典 審査委員長：志水 秀行 試問日：2025年 7月11日				
(論 文 審 査 の 要 旨)				
論文題名：Post-Discharge Self-Care Confidence and Performance Levels in Patients Hospitalized due to Heart Failure (心不全入院患者における退院後のセルフケアに関する自信度と達成度)				
心不全治療においてセルフケアは不可欠であり、入院中から退院後の移行期ケアを達成するために、集学的な多職種指導がセルフケアに対して極めて重要である。しかしセルフケアの退院後の達成度や臨床転帰に及ぼす影響を検討した研究は依然として限られている。本研究では心不全による入院患者を対象に、入院中のセルフケアの自信度と退院後の達成度との関連を検討し、さらに達成度が長期的な臨床転帰に与える影響を明らかにすることを目的とした。 審査では、心不全患者が増大している理由について問われた。高齢化の進行に加えカテーテル治療等の技術革新により救命可能な心疾患が増加したことが一因であると回答した。また心不全の原因疾患によるセルフケアの重要性の差異について問われた。虚血性心疾患など高血圧や糖尿病といった生活習慣病を背景とする患者群ではより重要性が高いと考えられると回答された。さらに地域性や患者背景の違いによる影響について問われた。本研究は大学病院の単施設での実施であり、その特性上リテラシーの比較的高い層に限定されていることが予想され、指導に対する学習効果が高い可能性があると回答された。本研究で実施したアンケートの妥当性について問われた。アンケートはヨーロッパ心不全セルフケア行動尺度（EHFScBS）を基に作成しており、同尺度は心不全患者に対するセルフケアの評価および支援のために広く使用されているものであると回答された。本研究の臨床実践への応用可能性について問われた。HFrEFや心不全入院歴を有するハイリスク患者に対して、定期的な運動や医療施設への相談など特定の項目を重点的に指導することで、セルフケアの達成度向上と臨床転帰の改善が期待できると回答された。また結果の外挿性および先行研究との比較について問われた。先行研究では多職種による心不全教育が再入院率やQOLを改善したとする報告がある一方で、セルフケアスコアの向上にはつながるものの臨床転帰の改善には至らなかったとする報告も存在し、外挿性を高めるためには多施設共同研究による検証が必要であると回答された。セルフケアの自信度や達成度と心不全の重症度との関連について問われた。入院期間を指標とした追加解析を行ったが、群間差は認められなかったと回答された。また達成度が高い群と低い群のスコアの判別基準について問われた。先行研究を参考にしつつ標本数が100と比較的少数であることから上位3分の2と下位3分の1に基づいて層別化したと回答された。 以上、本研究は多施設共同研究によって対象患者を増やすことでさらに一般化可能性を高める余地はあるものの、心不全患者のセルフケアに関する自信度と達成度、さらに臨床転帰との関連性を明らかにし、移行期ケアの質的向上に資する知見を提供した点で、今後の心不全診療において大きな貢献が期待される有意義な研究であると評価された。				